

枚ヲ水ニヒタシ頭ニ當テ、其上ヲ圖略○圖ノ如クニ手巾ヲ冠スレバ、齋口ト云具ヲ以テ討ルトモ、深疵ヲ負ズト云リ、是等ノ事ヨリ名トスルナルベシ、

〔仁勢物語^上〕おかしおとこほ。うかぶ。りして、ならの京、かすがのさとへ酒のみにいきけり、

〔嬉遊笑覽^{二上}〕五元集、名月や居酒のまんと頬かぶり、明曆二年丙申二月廿四日町觸跡々より如申觸候は、かぶり、頬覆面彌法度候間、あみ笠の下、又は編笠なしにも、堅仕間敷候、むかしよりこの法度は有しなり、

〔速水見聞私記^{十五}〕以手巾著頭事

玉篇曰、巾、几銀切佩巾也、本以拭物、後人著之於頭、

房^{○房} 按、本邦田舎之者、以手拭著頭、異邦自古有之事也、

〔嬉遊笑覽^{二上}〕古へ女は外に出るに、衣かつぎ深き笠を著、下ざまなるは、桂包みなどして覆面はせざりき、永正大永已後、手巾やうのものを頭にかぶり、上に笠きたり、これ覆面の類なり、^{○中俳}

諸懷子^{付合}立かへりみる塗笠の内、ふくめんを誰ともしれぬ姿にて、^{寛文のころ迄も、ぬり笠}

〔甲陽軍鑑^{十下}〕景虎^{○上} 三月中旬^{○三年} 永祿に、相摸の小田原へ押込、既に蓮池まで亂入に、心

もまらぬ關東侍大將衆に、少も機遣なく、甲を脱、白布の手巾をもつて桂包と云物に頭をつ、み朱さいはいをとりて、諸手へ乗わり、下知し人をいきたる出程共思はざる景虎のふりを見て、關東の諸侍大小共に、舌をふるひ、此大將を頼候は、ゆく／＼大事也と、面々身の上を思ふ人多き也、

〔嬉遊笑覽^{二上}〕桂包といへるは、鬢づ、みなり、桂女に限れるにあらず、音の同じきによりて桂

とかけり、手巾長からねば桂包ならず、

〔醒睡笑^六〕兒の噂